令和６年度　会派調査研究報告書

（視察先１箇所につき１枚）

会　　派　　名	上志の風
事　　業　　名	ワインツーリズム
事　業　区　分	研究研修

１　上田市での課題と研修・調査の目的

北海道余市町でワイン用ぶどうの本格的な栽培が始まったのは 1984 年。2011 年には、道内で初めて「北のフルーツ王国よいちワイン特区」として認定を受けた。2016 年には、余市町仁木町でワインツーリズムプロジェクトを始動。令和 5 年現在、ワイナリー経営者を含めてワイン用ぶどう栽培農家は 60 軒を超え、ワイナリーも 16 軒と、日本でも有数の一大ワイン産地となっている。
上田市は、2014 年ワイン特区になった「千曲川ワインバレー」に属し、ワイナリー数は今年度、2 施設から 4 施設に増える予定。余市町と同じブティックワイナリーが多い千曲川ワインバレーで、東御市や小諸市、坂城町など近隣市町村と連携したワインツーリズムを視野に入れ視察を行った。

２　実施概要

実施日時	視察先	北海道余市町
令和６年８月８日（木） １０時３０分～１２時００分	担当部局	総合政策部農林水産課・政策推進課

■余市町について

北海道余市町は、面積約 141 ㎢、人口約 20,000 人。千歳空港から高速道路を利用して約 2 時間。積丹半島と倶知安方面への国道の分岐点に当たる交通の要衝に位置する町。りんごやぶどう、梨などの生産量は全道一を誇り、えび、イカ、かれいなど海の幸にも恵まれている。また、水産加工製品、ワイン・ウィスキーの醸造業も盛ん。
余市町でワイン用ぶどうの本格的な栽培が始まったのは 1984 年。その後、栽培農家が拡大。2011 年には、道内で初めて「北のフルーツ王国よいちワイン特区」として認定を受けた。2016 年には、余市町仁木町でワインツーリズムプロジェクトを始動。

□ワイン関連産業の現状

R5 年、日本ワインの生産数量は合計 1 万 1987kl。うち北海道は 2484kl と山梨県・3466kl、長野県・3049kl に次ぐ生産量で、全体の約 2 割を占める。
余市町でのワイン用ブドウの栽培面積は 150 ヘクタールを超え（道内シェア 3 割）、生産量は例年 700 トン前後（道内シェア 5 割）で、栽培面積・生産量ともに国内トップクラスの規模。
令和 5 年現在、ワイナリー経営者を含めてワイン用ぶどう栽培農家は 60 軒を超え、ワイナリーも 16 軒と、日本でも有数の一大ワイン産地となっている。

報告内容	■ワイン特区とは 通常、ワインの製造免許を取得するには、最低製造数量が年間 6,000 リットルだが、特区制度により年間 2,000 リットルで免許取得が可能となった。また、農業者自らが営む農家民宿や農家レストランで提供するために製造免許を取得する場合は、最低製造基準が適用されないため、小規模事業者によるワイナリーの起業が容易になった。 □余市町のワイン政策の特徴 ①高品質化・高付加価値化に向けた取り組み 個人経営型のワイナリーが多く、通年でワイナリー見学を行う体制維持が困難。ワイナリーやヴィンヤードを巡りながら希少なワインを楽しめる農園解放祭「余市ラフェト」の開催。また、町で初期からワイン用ぶどう栽培に取り組んでいる生産者を中心に、「ワインを楽しむ会」を実施。（それぞれ年１回）町として関わるワインイベントは年に２つのみ。そのため、コンテンツの高品質化・高付加価値化に向けた取り組みに注力している。令和６年度からは、他産業への波及を目指した「世界に誇る美酒と美食のまち、よいちガストロノミープロジェクト」を始動させた。 ※ガストロノミー…料理やワインなどの食事全般を、文化や芸術のレベルで考えること ②国際マーケットを視野に入れた栽培品種の強化 国際的に人気の高い品種の新植に対して、補助金の上限額・補助率を高く設定。（ピノノワール、カベルネフラン、メルロー、シャルドネ、ピノグリなど特定品種１１種）結果、これまで栽培されてきた品種に加えて、ピノノワールの生産量が国内トップクラスになる。 ③ワイン産業支援員として地域おこし協力隊を任命 ワイン専門資格を有した協力隊が、町内ワイナリーへの支援や町産ワインの PR に従事している。また、ワインエキスパートの資格を有し、日本ソムリエ協会の名誉ソムリエに就任した髭男爵・ひぐち君を余市町ワイン大使として任命。町主催のイベントや SNS 等で積極的に発信を行っている。 ④ワイングラスメーカーとの包括連携協定を締結 ワイングラスメーカーの世界的老舗「リーデル・ジャパン」と自治体で初めて協定を結ぶ。町内飲食店にグラスを提供するほか、町民向け「グラステイスティング」セミナーを開催。また、ふるさと納税の返礼品としてのみ提供されるプロデュースワインのリリースも行った。 ⑤希少ワインが出品される「余市町感謝祭」でふるさと納税寄附額を増加 町内ワイナリーは規模が小さく、需要に対して供給が追い付いていない状況だが、ワイナリーがふるさと納税の趣旨に賛同。2020 年から希少な各ワイナリーのワインを期間限定で販売。１週間で１億円を超える寄附を受け、令和６年度から小中学校給食費無償化や保育所無償化などを実施する。

⑥自分のペースで周遊し、少人数で特別な体験を提供できるワインツーリズムを推進

個人経営型のワイナリーが多く、観光客の対応まで手が回らないのが現状。多くの観光客をいっきに受け入れることのできる施設も少ないことから、観光バス等による大人数で時間的な制約のあるツーリズムではなく、自分のペースで周遊し、少人数で特別な体験を提供できるツーリズムの在り方を模索している。今年度からは、新たに看板や駐車場など、観光客を増やすことが出来る環境整備に対して支援している。

感想・市政に活かせること

［感想］

ワインが好きな人であれば「ワインと言えば…」の地域を連想する中に「余市」は必ずと言っていいほど浮かんでくるまちである。今回視察を通して、そのブランディングに触れ、特に印象的だったのは、余市のワイナリーに合った「ツーリズム」の形。

上田市が属する千曲川ワインバレーには、見学ができるワイナリーが多い。一方、余市町では見学ができるワイナリーが数施設のみで、少ないことに驚いた。

余市町は、個人経営型のワイナリーが多くあるからこそ、ワインと食の高品質・高価格化を展開することで、さらに洗練されたブランディング形成を目指している。

どちらもそれぞれの地域の特性を活かした取り組みだが、ワインをきっかけに様々なコンテンツが融合する仕掛けは、千曲川ワインバレーや上田市でも活かすことが有用だと感じた。

地域の様々な資源を互いに活かし合える仕組みを上田市でも作っていきたい。

［市政に活かせること］

① 余市町には地域の希少なワインをグラスで飲めるお店が複数店舗あり、（ランチタイムでも飲めるお店も有）上田市でもワイナリーや飲食店と連携してグラスから地域のワインを楽しめる機会を作ることがワイン文化定着に寄与すると考える。

② 町民向け「グラステイスティングセミナー」もワイン文化定着に寄与すると考える。事業者向けのセミナーなども行うとさらにワインへの理解も深まると感じる。

③ ワインを中心とした「食」コンテンツの磨き上げは大切なこと。上田市でも、ワインとのペアリングを見据えた発酵食品など地元食材を活かしたレシピ開発を積極的に行っていくべき。

（文責：武田 紗知）